

スペイン風邪と吉田真三先生

亀山泰紀

新型コロナウイルス感染に関する報道一色のなかで、スペイン風邪のことも少しずつ知ることになりました。

世界第一次大戦のさなかに猛威をふるったスペイン風邪は、日本人の死者数が38万人を超えたとか、現在のA型インフルエンザ（エイチイチエヌイチタイプ）であるとか、耳の底に残っていた知識に肉付けがされ、血が通いはじめると、吉田真三先生のことをあらためて思い出します。

心の師である先生のことを、書きとどめておきます。

スペイン風邪流行と死者数

大正11（一九二二）年3月30日に内務省衛生局より発行された「流行性感冒かんぼう」を出版化した東洋文庫778内務省衛生局編『流行性感冒「スペイン風邪」大流

行の記録』（平凡社）は、漢字カタカナ文の文語調で読みにくいので、東京都健康安全研究センターのHP「日本におけるスペインかぜの精密分析」の文章で要約します。

1 回目の流行

1918年8月～1919年7月

死亡者数 257, 363人

2 回目の流行

1919年8月～1920年7月

死亡者数 127, 666人

3 回目の流行

1920年8月～1921年7月

死亡者数 3, 698人

1 回目の流行では、全国民の37・3%が罹患したことになり、患者100人当たりの死亡者数（死亡率）は1・22です。

2回目では、死亡率が5・29と大幅に増大し、ウイルスの変異によるものと考えられています。3回目の死亡率は1・65でした。

吉田先生誕生と父上の死

吉田先生は、上下町吉田呉服店の二男として、大正7（一九一八）年に誕生（推定）。

先生が父親をスペイン風邪で亡くされたことは聞いていましたが、いつ、幾つの時だったかは知りません。記録と照し合わせると、誕生直後から満三歳頃のこと。広島県の流行は第2回目が大きいのので、一歳前後の可能性が高いのですが、こんな幼少だったとは思いませんでした。他人の話を真剣に聞いていない、いい加減さを痛感しています。

福山誠之館^{せいしかん}中学から旧制広島高校を経て、東京大学へ進学、国文学を学ばれました。戦争で中国へ行かれた時の体験談はいろいろ聞きました。

終戦後帰国された時、恩師の久松潜一先生から声をかけられ、ちよつとお手伝いするつもりで尾道女子専門学校へ奉職^{ほうしよく}されましたが、戦後の苦難時代、短期大学設立への申請や認可に奔走^{ほんそう}した後も、経営難であえぐ学校の窮状^{きゆうじょう}を見捨てることができず、尾道で生涯をまっとうされました。

吉田先生との邂逅^{かいこう}

私が尾道短大に赴任^{ふにん}したのは、昭和43（一九六八）年4月で、5年後の昭和48（一九七三）年4月に、先生は第4代学長に就任^{しゅうにん}されました。

私は、中学・高校と男女別学だった私立日影館に通学しました。六年間、女子生徒と会話した覚えはありません。同級生の迫江君^{さきえ}とも、私たちの置かれた状況は異常だったと、よく話したものです。

大学に入学した時、国文科では新入生から大学院生までの学年別ソフトボール大会がありました。一年生は男性10人女性7人で、女性は必ず2人以上出場しなければなりません。私は先頭に立ってメンバーを決める役になってしまい、「おんなはセカンドとライト」と言ったところ、すぐさま反撃されました。

「亀山さん、おんなとは何ですか」

田舎ではおとこでありおんなであり、それ以外に呼び方など知りません。「おんな」ではない言い方を尋ねますと、「じよせいとかじよしとか、女の子とか、いろいろあるでしょう」

大分出身の太った人でした。

女性と素直に話せないまま大学生活を送り、大学

院修士課程を終える時も、女子短大の話を断つて大阪府立四条畷高校に勤めました。

尾道短大国文科は定員100名で、120〜130名もの学生が、教室一杯に詰め込まれ、男性は一人か二人。一度断り、二度目も断るつもりで尾道へ行つたのが、断りきれずに赴任することになったものですから、飲むたびに、三年たつたら高校へ替ると言っていました。

やはり中学・高校の同級生多留君も、私が女子学生相手に講義している姿が想像できないと言っていました。

吉田先生との邂逅がなかったら、尾道をやめていたでしょう。



マザコン先生

先生はクリスマスチャンでした。学生食堂でも、食前に小さく十字を切られました。私のことをなまぐさ坊主呼ばわりされながら、大きく包み込んでくださいました。私の指導教官の稲賀敬二先生も東大出身で、「君は吉田先生がおられるあいだ尾道を動けないぞ」と釘をさされるほどでした。

先生は広島高校一年生の時、退学覚悟で上下に帰省し、母親にその決意を告げました。すると母上は、先生を抱きしめて、おいおい声をあげて泣かれたそうです。理由も何も聞かれず、ただ泣かれるお母さんの涙が先生に降りかかり、もう一度やり直してみようと思われたのだそうです。

「わしはマザコンでいうのが口癖でした。ご母堂は女傑と言われ、町会議員も勤められました。」

吉田先生と私

当時の尾道短大の教官室は、三階建て建物の三階北側にありました。国文科の教官室は一番奥、一番北側で、南の水源地向かって経済科の教官室が二部屋、教養関係が一部屋、並んでいました。

国文科教員四名が同室です。吉田先生と私の所へ

来る学生が多く、先生も私も一緒に学生と談笑だんしやうしました。教官室は廊下とガラスで仕切られているだけで、部屋の中は丸見えです。

国文科では、前期末の休み期間中に、二回生の希望者が万葉旅行を実施していました。引率いんそつ教員は原則一名で、持ち回り。参加学生が多い場合は引率者を増加します。

先生の学長就任が発表された年、参加学生が多くて私が助っ人すけとになりました。順番どおりでしたが、この年の参加希望者は40名を超え、最終的に30名前後になりました。

国文科では、毎年新入生歓迎会が開催され、チューター毎ごとに学生が出し物を披露しました。教員も何か歌ったり、語ったりします。その時先生は、亀山は偉いそうなことを言っているが、わしが大学生だった時におしめをしていたんだぞと、よく言われました。私の誕生は、先生22歳の時です。

四年制大学に行きたかったのに親に反対された学生や、第一希望の受験に失敗して落ち気分で入学してきた学生が多く、その鬱屈うっくつした心情しんじやうを解きほぐすことが、先生と私との役目のような、默契もくげいのような使命感がありました。

三階建て建物の真ん中に階段がありました。講義をすませて二階から三階への踊り場を曲がった所で、吉田先生が学生の両肩に両手を置いて、「な、いいか」とおっしゃっていました。男女・師弟を超えた自然の情愛あふが溢あふれていて、私が先生の年齢になっても、これは真似まねできないと感銘かんめいしました。しかし後に私がこの話をしたために、先生は意識してしまわれて、あんなことはできなくなったと言われました。余計なおしやべりをしたと、今でも後悔こうかいしています。

安来市出身のAさん（卒業後山陰合同銀行勤務）が、結婚式に先生と私を招待しました。その時お父上が、入学当初はやめたいやめたいと言って家に帰って困らせ、その後尾道尾道とのぼせあがりましたとおっしゃいました。

結婚式前日は二人で清水寺しみずでらを散策さんさくし、安来からの帰り道では、安田で礼服を着替かえていただきました。

学長就任後の先生と私

学長就任の翌昭和49年、私は図書館長（任期2年）を任命。前年に助教教授になったばかりで、やっかまれました。

昭和50年は、1月にインドに出かけ、3月に慶見

誕生、10月広島カープ初優勝、図書館職員に赤ヘル
饅頭を配るといふ、思い出深い年でした。

学長二期目の最後の2年間、私は教務部長（任期
2年）に就任しました。学長職は孤独だよと言われ
ながら、教務部にしょっちゅう来られました。

学長二期目の終了が、ちょうど先生の退職（63歳）
でした。送別会を企画しましたが、拒否。何とか説
得して、私が司会を担当。最後に「かあさんの歌」
を全員に合唱してもらいました。

晴れがましいこと、特に社交儀礼的な会合を嫌わ
れた先生でしたが、私の司会を喜んでくださいまし
た。

先生は叙勲を拒否され、当時の学長が私にその説
得を依頼しましたが、私も拒否。

85歳か86歳で逝去。記憶が曖昧です。退職後も事
あるごとにお宅に伺って長話をしていましたので、
節目がぼやけています。

葬儀をめぐって、大学側と遺族との間でぎくしゃ
くしました。体面を整えたい学校側に対して、先生
の奥様は花束も弔辞も拒絶。奥様は亀山に任せてい
ると突っぱねられます。四年制に昇格した直後で、
文部省出身の学長と私は大猿の仲。同窓会長が執拗

に私を責めて難義しましたが、奥様の意に沿う結果
に収め、厳かでしめやかなミサでした。



前列左吉田 右稲賀 後列左森山 右亀山

—かめやま・やすのり—尾道大学名誉教授—

追記

亀山泰紀名誉教授「スペイン風邪と吉田真三先生」は、お子様方3家族に宛てられた私信『倉敷だより』6号（2020，6，5）から転載させていただきました。尾道短期大学国文科時代にゼミ生であった藤井佐美は時折拝読の機会をいただいております、今号での掲載をお願い申し上げます。本来は書簡であるため、断られるのを覚悟しておりましたが、教子のおわがままをお許しくださいました。

先生、ありがとうございました。

合掌